

小学校の学校づくりにおける小学校の意義・意味

－「学びの共同体」による学校づくりに取り組んだ校長の聞き取りから－

長澤 貴¹

要旨

学校の意義・意味は、自明ではなくなっている。学校づくりにおいては、学校の意義・意味を自ら問い、そして同僚や子どもたちと共有しあうことが必要である。「学びの共同体」に取り組んだ二人の小学校元校長の聞き取りを通して、二人がどのような小学校の意義・意味を見出したのかを明らかにする。二人はそれぞれ別のアプローチで異なる小学校の意義・意味を見出している。そして、二人が見出した小学校の意義・意味が、学校づくりにおいてどのように活用されるのか明らかにする。

キーワード 小学校 教育の意義・意味 学校づくり 学びの共同体 校長

1. 序文

小学校で学ぶことの意義・意味は、自明ではない。日本での初等教育は、1872年の学制発布においてスタートする。そして1886年の小学校令において4年間の義務教育として再スタートする。しかし近年、小学校で学ぶことの意義・意味については、その喪失と意義・意味をいかにして回復するかについての議論がなされるようになった。すなわち、小学校で学ぶことの意義・意味は、もはや自明のものではなく、改めて見出され、議論される対象となった。

小学校における暴力行為、学級崩壊、不登校といった問題行動が近年増加している。このような現状に対して、熊谷(2017)のように子どもの生活習慣を論じられることがある。または、就学前教育期から学校教育期への移行時に生じる様々な問題(いわゆる「小1プロブレム」)の延長として小学校期の問題行動を捉え、その移行期に焦点を当てる研究(例えば、菊池(2008))のような研究もある。すなわち、小学校における問題行動は、子どもを取り巻く生活環境の変化や、就学前と学校教育期の環境の変化の問題として捉えられている。

一方で、PISAやTIMSなどの国際調査において日本の子どもたちの学ぶ意欲の低下が指摘されている。また、佐藤(2000)は、子どもたちの学びからの逃走を指摘する。子どもたちの学ぶ意欲の低下、もしくは学びからの逃走という事態は、子どもにとって学ぶことの意味が失われていることを意味しているのではなかろうか。

このような小学校の意義・意味が、自明ではなくなっている状況の中で、小学校において学校づくりをしていくことは困難さを伴う。ノイラートの船のごとく、その意義や意味を絶えず見出しつつ、学校づくりという羅針盤なき航海を続けなければならないからだ。

そこで、本稿では、小学校で学ぶことの意義・意味を見出すことの中で、小学校の学校づくりがどのように行われるのかということ明らかにする。このためには、小学校での校長経験があり、そして現在でも「学びの共同体」(佐藤, 2012)のスーパーヴァイザーとして小学校に関わり続けている二人の元小学校教師に聞き取り調査を行った。小学校現場の外側から小学校で学ぶことの意義・意味を見出そうとするのではなく、小学校現場の内側から意義・意味を見出すことを試みる。

2. 目的

本稿では、小学校の学校づくりにおいて、小学校で学ぶことの意義・意味がどのような役割を果たすのかを見出すことを目的とする。

小学校における児童の問題行動が増加している。文部科学省(2019)によれば、学校の管理下・管理下以外における暴力行為発生件数は、平成30年度に36536件であり、中学校や高校のそれを抜いた。暴力行為については、高校が横ばい、中学校が低下傾向にあるのに対して、小学校は平成24年頃より増加傾向にある。さらに、同じく文科省(2019)によれば、いじめの発生件数は、

¹ 短期大学部こども学専攻

平成 26 年以降増加の一途をたどり、平成 30 年には、425,844 件発生している。この件数は、中学校の 97,704 件、高校の 17,709 件と比較しても非常に多い件数となっている。また、不登校については、平成 30 年度に小学校では、44,841 人（全児童数割合 0.70%）、中学校 119,687 人（全生徒数割合 3.65%）と中学校に比べ人数及び割合共に低い。しかし、その増減率は、平成 30 年中学校が前年比 9.8%であるのに対して、小学校が前年比 28.0%と小学校における不登校が急激に増加している。このことは、小学校で学ぶことの意味が子どもにとってもはや自明でなくなっていることを意味しているのではなかろうか。

しかし、学ぶ意欲について議論されることはあっても、学ぶことの意味や意義が議論されることはない。学ぶ意欲については、例えば、笠井（2018）、増田（2017）、奥村（2012）など教科ごとに学ぶ意欲を高めるための授業についての研究が多くある。これらは、増田（2017）のように算数を学ぶことの意味そのものを見出すことにより子どもたちの意欲を喚起しようとする研究はあるものの、多くは学ぶことの意味・異議それ自体は、問われることがない。

本稿では、小学校における問題行動の増加や学ぶ意欲の低下または学びからの逃避という事態を小学校の意義・意味の希薄化ととらえ、そのような状況の中でいかに小学校の学校づくりが行われるのかということ明らかにする。

3. 方法

3.1. 調査の方法

小学校で校長経験がある A 氏と B 氏、2 名へ聞き取り調査を行う。聞き取りは、A 氏が 9 月と 12 月、B 氏が 9 月と 11 月とそれぞれ 2 回ずつ行った。それぞれ、1 時間から 2 時間程度の聞き取りの時間を設けた。A 氏への聞き取りは、執筆者の研究室にて 2 回とも行った。B 氏への聞き取りは、1 回目は電話で、そして 2 回目は、B 氏居住地近くの公民館にて行った。

なお、調査に当たっては、倫理的配慮を行った。研究協力者二人には、研究の主旨を説明し、不都合がある場合にはいつでも、研究から降りることができると、公表に当たっては同意を得ることを説明した。

3.2. 対象

A 氏は、三重県の北部の Y 市で県教育委員会事務局や市教育委員会事務局などの行政職として教師生活の三分の一を過ごし、60 歳定年まで小学校に勤務した。その後は、市の教育アドバイザーや、「学びの共同体」のスーパーヴァイザーとして各地の小学校や中学校に関わっている。

一方の B 氏は、三重県の南部の O 市や K 町などの小学校に 60 歳定年まで勤務した。A 氏と異なり、教育委員会事務局等の行政職の経験はない。また、定年まで勤務した K 町立 I 小学校では、6 年間にわたり校長職を務めた。定年退職後は、「学びの共同体」のスーパーヴァイザーとして各地の小学校に関わっている。

二人とも、66 歳（調査時点）の同い年である。

3.3. 分析の方法・観点

佐藤（1995）は、学校の在り方の問い方として「制度論的アプローチ」と「存在論的アプローチ」があると言う。「制度論的アプローチ」は、「学校という社会的制度の目的と機能を問う道筋」（p.24）である。一方、「存在論的アプローチ」は、「私たち一人ひとりの経験の内側にある学校を吟味し、人生における学校の意味や価値を問い直して、私たちの希求する学校のイメージを探索する道筋」（p.24）である。本稿では、小学校で学ぶことの意味・意味を問うにあたり、「存在論的アプローチ」を用いる。では、だれにとっての学校の意味や価値なのか、誰の存在論なのか。本稿では、小学校において学校づくりを行ってきた校長二人に焦点をあて、彼ら二人にとっての学校の意味・意味を描いてみたい。

そこで、二人が小学校教員になったきっかけと二人が校長として取り組んだ学校づくりという二つの観点からインタビューを行った。本稿の目的である、小学校で学ぶことの意味・意味ということについては、インタビューの中で明示的には質問していない。

また、二人の対象は、「学びの共同体」の実践に校長として、そして「学びの共同体」のスーパーヴァイザーとして取り組んでいるという共通点を持っている。佐藤（2012）によれば、「学びの共

同体」は、子ども一人一人の学ぶ権利を保障するとともに、教師の専門家としての成長も保障しようとする授業改革を柱とした学校改革の哲学とヴィジョンである。子どもの学ぶ権利の保障においては、学ぶことの意味の獲得による子どもの学ぶ権利の保障が目指されている。学ぶことの意味は、授業における三つの対話の生成によって獲得される。授業における三つの対話は、教育内容である対象との対話、協同的に学ぶことによる他者との対話、そして自己との対話である。

「学びの共同体」においては、学ぶことの意味の喪失を授業における三つの対話の喪失と捉え、三つの対話の生成を授業づくりの核にしている。

「学びの共同体」に取り組んだ校長二人を対象として選んだのは、「学びの共同体」が学ぶことの意味について意識的であると考えられるからである。「学びの共同体」の実践に取り組むこの二人が、小学校で学ぶことの意味・意義について意識であると考えられる。インタビューを通じて、小学校で学ぶことの意味・意義について語られるのではないかと考えた。

4. 結果

両氏へのインタビューは、小学校教員になるきっかけについての問いから始められた。そして、両氏が校長時代どのように学校づくりを行ったのかについて問った。

4.1. 小学校教員になるきっかけについて

A氏は、大学時代フレーベルの思想を中心とした幼児教育の思想を学んでいる。そのA氏が、小学校教員になるきっかけについて次のように語っている。

きっかけは、やはり幼児教育の大事さっていう、僕の論文が、あのフリードリッヒ・フレーベルの、あの、教育理念を、あのまとめ上げたもので、やっぱり、小学校ってものすごく大事なものだよね、幼児教育って大事だよね。で、幼児教育の大事さっていうのは、発達段階にに応じて、その、小学校の先生っていうのは、愛情をもってやってないと、中学校や高校もおんなじなんだけど、その、人と人との包み込むようなその教師でないと、子どもはなかなか入ってこない。まあ、小学校はすごく大事、だから、幼児教育から小学校にかけての教育がしっかりできていれば、中高と、あの、伸びていくやつはものすごく伸びていくし、やる気の出るやつは、出てくると思う。それで、小学校の教師になろうと思ったんやね。

この語りの中で、「大事」という言葉が使われる。この「大事」さこそが、小学校の意義・意味につながるのだが、ここでは「大事」さの中身については語られない。

一方、B氏は、大学時代は理系の学問を学び、研究者を志していた時代もあった。しかし、ふと振り返った時、小学校時代のことがよい思い出として思い起こされ、子どもたちのために何かできないかと小学校教員になることを決めた。また、大学時代は、地元を離れていたものの、地元のために何かができないかという思いもずっとあり、地元に戻り小学校教師として働くことを決めている。この地元のため、地域のためという思いは、B氏の中ではとても強く、小学校教師時代にも引き継がれている。例えば、次のように語っている。

ここで生きとる人たちが、生きとる喜びみたいななんないのね、うーん、漁場はねえ、なんとかしてあげたいんだけど。

インタビューの場となった、港町の様子や風景に触れつつこのように語っている。そして、しばらくの沈黙ののち、次のように語る。

実はねえ、自分がねえ、なんでこんなに、いろんなことを共同体の中で言うかちゅうとね、僕ね、40代でね、地域の人らと一緒に街づくりしとったんですよ。教師しながら。ゴルフ場反対運動も阻止して、そっから、「Nの会」っての誕生させて、みんなで、で、一番活性化した地域があるんですよ。で、それから、ここ離れて15年、離れたら、空洞化ってました。もう、街の屋台骨全部腐ってました。あの時にもう腐りは始まっと思ったと思うよ、僕ら最盛期のときに。でも、それをねえ、教育という角度から、うん、支えとったつもりやけど、うーん

B氏の語りからは、B氏が、教育と地域づくりをつなげて考えようとする思考が見て取れる。そして、教育による地域づくりが、B氏の教師をすることの意味となっている。

4.2. 学校づくり

ここでは、二人がどのように学校づくりに取り組んだか、見ていきたい。

A氏は、4年間の勤務後、定年退職を迎えたH小学校での学校づくりについて次のように語る。

このH小学校は、学調（学力・学習状況調査）とかそんなんでも、日本一にむかって進んでいきたい、っていうことをPTAの役員とかでもしゃべったんですよね。しゃべったら、「あ〜、校長先生、そんなしなくても、うちの子は、ちゃんと塾に行ってるので、大丈夫です」、で、これが頭、カチンと来て、あっ、だから、常にそれを目指そうと、だから、運動会で、最初の運動会の挨拶も、その当時の教員がよく言うんやけども、もう、校長先生は、朝のあいさつで、日本一の学校にしますって、言ったって、（笑い） おお、言ったなあって思いながら、僕は、そうするつもりだったんだよね。学ぶにしろ、遊ぶにしろ、何にしろ、日本一にする。学調、日本一だと、それを目指して、先生たち頑張ってもらわないと。何やってもいい、子どものためにいいと思ったら、何やってもいいから、っていう言い方ですよ。

Y市の中心地に位置するH小学校は、県外からの転勤族が多い。そして、教育への関心も高く、子どもは、H小学校を卒業すると、県外の全国的に有名な進学校へ進学する子どもも何人かいる。A氏は、とかくすると「学級王国」と揶揄され教師の同僚性が築きにくい小学校の風土の中、同僚性を築き、学校を作っていくためには、「日本一の学校」を作るという共通目標が必要だったという。

また、「日本一の学校」を作るために必要だったこととして、次のように語る。

それが（なんでもいいから頑張るといこと）、一人一人のこどもに意欲っていうか、自信が生まれてこないとね。そのためには、先生がそういう自信を持たないと。

A氏は、同僚の教師たちにも自信を持ってもらいたいという。そして、A氏は、先生たちに自信を持たせるために、先生たちの授業を見たあと、校長室に呼び、丁寧に指導をしている。

そして、学校づくりについて次のように語っている。

だから、その年代にあった教育って、僕はあると思うの。どんだけ自由な発想であっても、あの、人間の細胞の発達って、そうじゃないですか、そんなに、100年前から、100倍になってるのかって、なってない。生物の進化は。僕は、その、大学に戻るんですけど、大学の時の論文では、脳細胞と教育っていうことでまとめたんで、だから、どんな刺激を脳に与えるのかっていう、それによって変わってくるんだよなっていう、で、脳細胞をどう連結させていくのかっていうことを考えて、学校を作っていくと、ということは、発達段階があって、それに応じた刺激をちゃんとやらないと、学校としてまとまんないよね。だから、その年度だけよかったんじゃないよ。6年間来てもらうことによって、人として探求していく、そういう子どもたちになってほしいよなっていう。

ここでは、発達観とそれに基づく教育観による学校づくりが語られている。年齢に応じて適切な教育を行うということが小学校の意義であり、そしてその意義のもと学校づくりを行おうと考えている。

ところで、「学びの共同体」に取り組むきっかけは、「日本一の学校」をつくることの一環である。また、この取り組みは、A氏が今まで培って来た教育観や授業観に照らし合わせて全く違和感がなかったことも挙げている。

一方のB氏は、定年まで校長として勤めたI小学校について次のように語る。

I小は、歴史的にみて吹き溜まりだったの、メンタルと。ほいで、変わってきた連中も、◇◇市でちょっと困ったというメンタルの人、50（歳）過ぎのな。〇〇小で使いもんにならんでず

つと特別支援ばかりもたされとったIっていうの。それから、Kって言って、〇〇学校出たての、〇大出てすぐ先生になった、俺より二つ上の、とかな。まあ、若いのもちょっとおる。いやまあ、なんていうことはない、普通の吹き溜まりの学校。ところが、先生らが一番感じたのは、「どうせおれなんて」っていう、これで教師しとるのね。第一線でやってるんじゃないで、ちょっと休みに来て、「私はあそこで務まらんでこっちに来た」とかね。だから、つまり、その学校に所属している意味みたいなんが、何も持ってなかったの。

I小学校の先生たちが、教師としての自尊心も、教師を行うことの意味も、そしてI小学校に所属していることの意味もない中、『何言ってんだお前ら』って、『このメンバーでしかできないことをやろう』って、で、このメンバーでいいんだよスタートは。」と、始めたのが「学びの共同体」だったと言う。

また、B氏は、自分の行った学校づくりについて次のように語る。

俺の実践はね、授業づくりじゃないんだよ。「学校づくりでしょ？」(筆者) うん、で、同僚性づくりなんだよ。教師が、教師として育っていく基盤、を、支える、のは何かっていう、やっぱり、人間らしく、人間として、一人間としてプライド持って生きれる、そのための、教師としての専門性、って、何？って、いうところでの実践やね。

B氏は、学校づくりにおいて同僚性づくりに核を置き、同僚性の中で互いに教師としての専門性を高められるような学校づくりを目指している。そして、この同僚性の中で高めようとする専門性には、教師としての意味についても含まれている。

(教師としての意味を)失ってるんですよ、実は。だから、あいつらは、そういう意味を、自分の中に芽生えさせて、で、発酵させて、実践したときに、「あっ、こういうことか」って、落ちてくると、揺るがない。

B氏は、教師としての意味を「芽生えさせ」「発酵させ」るために、教員との対話を繰り返してきている。

ところで、ここで語られる教師としての意味の具体的な中身は何か。4.3で詳しく見るように、教師としての意味としてB氏にあるのは、地域の課題である格差・貧困のことである。格差・貧困を連鎖させないために子どもをどう育てるかという点にB氏は、教師としての意味を見出している。そして、この教師としての意味が同僚とも共有されていく。このような教師としての意味を共有することに対しての同僚に反応を聞くと、「語ってましたね。ずっと。その教員らもね、子どもの親やでね、他人事じゃない。」と語った。地域の現状とそこで生きる子どもたちへの思いが、同じ地域に生きるものとして共有された。

学校づくりにおいてA氏とB氏に共通している点がいくつかある。一つは、「日本一の学校」や「学びの共同体」といった共通目標の設定である。また、教師の専門性、もしくは自信をいかに高めるかということに校長として心を砕いていることである。

4.3. 小学校の意義・意味について

本稿のテーマである小学校の意義・意味について、二人へのインタビューの中で、明示的に質問はしなかった。ここでは、小学校の意義・意味についての二人の考えが伺える語りについて見ていく。

A氏は、退職して「学びの共同体」のスーパーヴァイザーとなり、様々な学校に関わる経験を振り返り、次のように語る。

小学校の発達段階に応じては、やはり、その、学び方を教えなきゃいけない。で、学んで楽しいね、ってことを教えなきゃいけない。それを体感させていく、そういう、その授業をできる先生でないと。だから、悪いことを悪かって言えないじゃない。最近ねえ、ダメなことをダメって言わないんですよ。だから、ある年齢まででそういうことを、きちっと教え込んでない

と、学級崩壊しても元に戻らない。だって、それまで許されてきてるもん。

さらに、次のようにも語る。

9歳までにダメなことはダメっていう、日本の教育の、「つ」の教育ってあるじゃないですか、1つ、3つ、4つ、9つ。「つ」がつく時期は、ものの善悪をきちっと教えなきゃいけない。体感させやんと。それは、暴力なんじゃなくて、いけないことはいけないんだよっていう、相手がどんなにいやがってるか、ダメなことはダメってちゃんと教えないと。そういうことなくして、小学校で学ぶ、学び合って難しい。

発達段階に応じた教育、および年齢の段階に応じた教育が必要であると語られている。A氏がどのような発達観とそれに基づく教育観を持っているかということは、4.2.の学校づくりについての「発達段階があって、それに応じた刺激をちゃんとやらないと、学校としてまとまんないよね。」という文脈においても明らかである。その発達観は、ある年齢の時点で適切な指導を行わなければ、取り戻すことが難しいと考える発達観である。そして、このようなA氏がもつ発達観が、A氏が考える小学校の「大事」さにつながっていると思われる。すなわち、各年齢段階においてやっておかなければならないことを行うための教育、学校というのが、A氏にとっての幼児教育や小学校の「大事」さである。

また、このA氏が考える小学校の「大事」さは、A氏の教師としての体験からも裏付けされている。

僕は、ほとんどが5,6年だったんです。で、5,6年もってよかったなあと思うのは、3,4年生までに、やらなきゃならないこと、人の話を聞くこと、善悪が分かること、が、きちっと、教えてであると、ものすごく伸びる。

さらに、困難な学校へ赴任し3年生を担任した経験からも、「3,4年の間にせなあかんっていうことを自分は、ものすごい思ってた」と語る。このように、発達論による小学校の大事さがA氏の中で継続されていった。

一方B氏は、退職時まで6年間にわたって校長を務めたI小学校での学校づくりについて振り返る中で、次のように語っている。

実はね、教頭時代、まあ、いろいろ苦労はあったけど、あの一、学校ってなんやってことをずっと勉強しとったんよ。で、2009年に、えっと、俺が校長になったのは、2005年、6年かな。やから、佐貫(2009)さんの論文なんよ、「自己責任論に立ち向かう学びとつながりを」っていうこれなんやけど、地域分析したり、教育上分析したりさ、自分の力でできたらしたいと思ってやとったけど、できないんよ。で、ずーと論文探したり、いろんなこと探したりして、あの一、これ読んだときに、目からうろこやった。やった、やと探したのあった。

B氏は、4.1.見たように、地域課題や地域づくりとの関わりで教育を考えようとしている。地域課題や地域づくりと教育との関わりをB氏はどのように考えているかということは、次のような語りから明らかになる。B氏が、I小学校の校長時代に、保護者の自殺が2件あったという。そのことを振り返りながら、次のように語る。

これなあ、もうほっといたらなあ、最後の年の6年生なんか、行くところないわ。でも、親も、中途半端に、最底辺這いずり回ってきた親が、結構おるんだよ。で、その人らはええけど、おんなじ最底辺這いずり回るようなことやとって、子どもも就職ないんだよ。実は。今の時代。

B氏は、この地域の課題を経済格差と貧困であると捉えている。その課題に抗い克服するためのものとして小学校教育の意味と捉えている。そして、B氏が見出していた経済格差と貧困に抗うための学びとして「学びの共同体」を取り組み始めた。

校長になって、で、これ（佐貫（2009）の「自己責任論に立ち向かう学び」）温めて、で、提案するときにはこれだけ出すの。で、これ資料としてつけといたん。で、これを綿々とやったの、うちの学校では。こんな状況がやばい日本の中に蔓延しとると。で、これを回復するための5つの方策ってのがあるんやと。それをまとめたのが、最後の方なんやけど、（当時の日記、資料を出す）、教育における貧困に立ち向かう教育ってことで、1、2、3 4 5 ってあるんさ。で、それをまとめて、これやな、なぜ「学びの共同体」なのか。書いてあるやろ？（資料を読む）佐貫氏の論文の中で、提案された柱の中で次のような項目がある。教育に求められる課題には5点ある、と。1、2、3、4、5 ってあって、えっと、1、2、5の観点、「学びの共同体」の観点と一致する方法であると。だから、私は「学びの共同体」、共同化を図る授業に大きく思想の一致をみるので、このことによって、私は実践の主体者として、参加するっちゃうこと。決意文書いとる。

B氏において、格差・貧困への抗い地域の課題の解決することに見出していた小学校で学ぶことの意義・意味は、「学びの共同体」の取り組みへとつながっている。

5. 考察

A氏とB氏の考える小学校で学ぶことの意義・意味を両氏の経験に内在するものとして描き出そうとした。すなわち、両氏にとって小学校で学ぶことの意義・意味の「存在論的」次元を見出そうとした。その結果、両氏の小学校で学ぶことの意義・意味の見出し方と見出した小学校で学ぶことの意義・意味に差異が見られた。しかし、両氏が見出した小学校で学ぶことの意義・意味は、校長として学校づくりを行っていくうえで、職員間の共通理解が図られている点では共通している。

A氏、B氏ともに小学校の意義・意味が、意識されているが、両氏において意義・意味の見出し方が異なっている。A氏においては、発達段階に即した教育の必要性という「大事」さである。また、B氏においては、教頭時代からの学校とは何かという問いの中で見出した、地域の課題である格差・貧困へ抗うための教育である。いわば、A氏が小学校の意義・意味を「制度論的」に見出しているのに対して、B氏は、「存在論的」に見出している。A氏は、小学校教諭を目指す段階で小学校の意義・意味を「制度論的アプローチ」によって見出していた。そして、それは小学校教師としての体験の中で裏打ちされて行っている。それに対してB氏は、その地域で生きる上で避け通れない格差・貧困の課題へ立ち向かうために学校はどうあるべきかという「人生における学校の意味や価値を問い直し」（佐藤, 1995, p. 24）を通して小学校の意義・意味を見出している。

このように見出された小学校の意義・意味は、A氏、B氏それぞれにおいて、学校づくりに活かされる。A氏の発達段階に即した教育という小学校の意義・意味は、学級崩壊を防いだり、学校をうまく機能させるために同僚たちに共有される。一方、B氏においては、小学校教師としての自分を見失った同僚たちが再び自分を見出す契機として小学校の意義・意味を活用している。

6. まとめ

本稿では、小学校の校長として「学びの共同体」の学校づくりに取り組んだ二人に焦点を当て、二人が見出した小学校で学ぶことの意義・意味について考察した。しかし、小学校で学ぶことの意義・意味が重要となるのは、そこで学ぶ子どもたちである。子どもたちにとって、小学校で学ぶことの意義・意味がどのように経験されているのかについては、今後、授業研究を通して明らかにしていきたい。

文献

- 笠井悠（2018）：「小学校の学びを中学校へつなぐ単元の開発－説明的文章で、読みの知識・技能の汎用性を高め、学ぶ意欲を育む－」, 教育実践研究 28, 13-18
- 菊池知美（2008）：「幼稚園から小学校への移行に関する子どもと生態環境の相互調節過程の分析移行期に問題行動が生じやすい子どもの追跡調査」, 発達心理学研究 第19巻, 第1号, 25-35
- 熊谷和彦（2017）：「小学校の基本的生活習慣に係る調査研究」, 教職研究（2016）, 197-218

- 増田吉史(2017):「何のための算数か—『算数科概論』授業実践を通して—」,教育総合研究 1, 223-233
- 文部科学省(2019):「平成 30 年度 児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果について」
- 奥村一将(2012):「生活科における「自ら学ぶ意欲」の要因と構造に関する一考察 ～野菜の栽培活動を通して～」,生活科・総合的学習研究 10, 21-30
- 佐藤学(1995):『学びその死と再生』,太郎次郎社
- 佐藤学(2000):『「学び」から逃走する子どもたち』,岩波書店
- 佐藤学(2012):『学校を改革する - 学びの共同体の構想と実践』,岩波書店
- 佐貫浩(2009):「自己責任論に立ち向かう学びとつながりを - - 貧困とたたかう教育実践の視点 (特集格差・貧困に抗して人間らしく生きる)」,教育 59 (8) ,4-13,国土社

Significance and Meaning of Elementary Schools in Creating School

**-Based on Interviews with Principals having worked
on Creating Schools on " Learning Community "-**

Takashi Nagasawa

Summary

The significance and meaning of school is no longer obvious. In creating school, it is necessary to ask the meaning and meaning of the school and share it with colleagues and children. Through interviews with two former elementary school principals having worked on "creating learning community," we will clarify what kind of meaning and meaning of elementary schools they have found. They found the significance and meaning of different elementary schools with different approaches. Then, we will clarify how the significance and meaning of the elementary school found by them are used in creating their schools.

key words Elementary school Significance and meaning of education Creating school
Learning community Principal